



摂食障害のある子どもとその家族への看護に関する研究

種吉, 啓子

(Degree)

博士 (保健学)

(Date of Degree)

2008-09-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲4452

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1004452>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



氏 名	種吉 啓子
博士の専攻分野の名称	博士（保健学）
学 位 記 番 号	博い第 65 号
学位授与の 要 件	学位規則第 5 条第 1 項該当
学位授与の 日 付	平成 20 年 9 月 25 日

【 学位論文題目 】

摂食障害のある子どもとその家族への看護に関する研究

審 査 委 員

主 査	教 授	法橋 尚宏
	教 授	松田 宣子
	教 授	宮脇 郁子

(別紙様式3)

論文内容の要旨

専攻領域 看護学

専攻分野 家族・在宅看護学

氏 名 種吉啓子

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を()を付して併記すること。)

摂食障害のある子どもとその家族への看護に関する研究

論文内容の要旨 (1,000字～2,000字でまとめること。)

母子保健の国民運動計画「健やか親子21」の主要課題の一つ「思春期の保健対策の強化と健康教育の推進」の保健水準の指標として15歳の思春期やせ症の減少が掲げられ、わが国において摂食障害は子どもそして社会の深刻な問題と認識されている。さらに、近年では摂食障害の症状が慢性化していることが言われており、子どもの症状や治療、日常生活をともにする家族への影響が大きく、家族員の過重な負担が生じ、家族の機能が低下することが予測される。そこで、子どもの発症にともない子どもの身体的な治療と同様に、家族に対する有効な看護を明確にする必要性を考えた。しかし、国内では、摂食障害のある子どもと家族に対する看護研究は、子どもの経過を述べる事例検討が多く、さらに、摂食障害のある子どもの家族の経験や家族の変化に注目し研究されたものは少なかった。そのため、看護の現状と具体的に効果的な支援を明らかにすることができなかつたので、先行研究からは、摂食障害のある子どもと家族に対する看護への示唆を得ることができなかつた。

以上のことから、本研究は、第1段階として、摂食障害のある子どもとその親を支援する病棟看護師が、自分たちの役割をどのように認識し、看護実践をおこなっているのかを明らかにする必要があると考え研究を行った(研究1)。その結果、看護師は《キャストの用意》《プチ安全社会の調整》《社会生活のオリエンテーション》《家族に力をつける》《キャストの要件》という5つのカテゴリーから構成された「プチ安全社会のキャスト」という役割を認識していたことが明らかになった。「プチ安全社会」とは、子どもにとって安全基地のような環境であり、看護師はその「キャスト」となり、子どもに対して社会生活のリハーサルを行ってい

た。「プチ安全社会のキャスト」は、役割を遂行するための看護師の準備や条件が表現された側面と、子どもとその親に対する役割の果たし方が表現された側面が存在した。また、「プチ安全社会のキャスト」という役割は、子どもとその親のライフスキルの向上につながるものが考えられた。しかし、子どもに対しては摂食障害から回復するために看護実践がなされているが、家族に対しては看護の必要性を認識しながらも積極的に実践するに至っていない現状と課題が明らかになった。

そこで、看護師以外の研究も検討し、摂食障害と家族および家族機能について検討することが必要である考え、第2段階として、摂食障害と家族および家族機能に関する諸外国を含めた研究の現状について文献検討を行った(研究2)。その結果、看護においては摂食障害のある子どもと家族に対する実践を模索している現状、摂食障害のある子どもの家族に対しては強みを明確にすることが有効な支援につながることで、くわえて、家族機能に働きかける支援を検討する必要性があること、摂食障害の症状が慢性化していることを考慮し、長期的な支援を行うために縦断的な研究が課題であることが明らかになった。

これらの研究結果から得られた課題をふまえ、第3段階として、摂食障害のある子どもをもつ家族の変化の過程(研究3)を縦断的に明らかにし、今後の看護実践への示唆を得ることを目的に研究を行った。その結果、《仲良し家族を実践する》《変化に囚われる》《過去と決別する》《成長を積み重ねる》《腰を据える》《情報を求める》《医療とつながる》という7つのカテゴリーからなる親の適応行動過程が明らかになった。その親の適応行動過程を促進させることは、摂食障害のある子どもの回復を促進させることが考えられた。

以上の3段階をふまえた研究から、コミュニケーションを通して対象者が内省し、新しい行動様式を試みられるようになることを明確に看護目標に掲げ、対象者と看護師の間における信頼関係を築き、基本的なコミュニケーションを実践すれば、摂食障害のある子どもの家族に対する有効な看護実践につながるという示唆を得た。しかし、本疾患の特徴や子どもの経過を鑑みると、この結果を用いて看護実践を行いその結果を評価するためには、長い時間をかけて信頼関係を築き実践することが重要であり、さらに、子どもの病状や家族の状況に応じて看護実践のバリエーションを広げる必要がある。本結果が、増加し長期化している摂食障害のある子どもとその家族への有効な看護をはじめのきっかけとなり更なる研究成果をもって発展されることが期待される。

指導教員氏名 看護学領域 教授 法橋 尚宏 先生

(別紙 1)

論文審査の結果の要旨

氏 名	種 吉 啓 子		
論 文 題 目	摂食障害のある子どもとその家族への看護に関する研究		
審 査 委 員	区 分	職 名	氏 名
	主 査	教 授	法 橋 尚 宏
	副 査	教 授	松 田 宣 子
	副 査	教 授	宮 脇 郁 子

要 旨

本論文は、摂食障害のある子どもとその家族への看護を明らかにするために、3本立ての研究で構成されている。

研究1では、病棟看護師が自分たちの役割をどのように認識し、看護実践を行っているのかを明らかにする目的で、看護師を対象とした質的帰納的研究を行った。その結果、看護師の役割として、「キャストの用意」「プチ安全社会の調整」「社会生活のオリエンテーション」「家族に力をつける」「キャストの要件」という5つのカテゴリーが明らかになり、この役割を遂行することが子どもとその親のライフスキルの向上につながると考えられた。

研究2では、摂食障害と家族および家族機能に関する国内外の研究の現状について文献検討を行った。その結果、摂食障害のある子どもと家族に対する看護実践を模索している現状、家族の強みを明確にすることが有効な家族支援につながることで、摂食障害の症状が慢性化していることを考慮し、長期的な支援を行うために縦断的な研究が課題であることが明確になった。

研究3では、子どもの摂食障害のある子どもをもつ家族の変化の過程に明らかにし、今後の看護実践への示唆を得る目的で、親を対象とした質的帰納的研究を行った。その結果、「仲良し家族を実践する」「変化に囚われる」「過去と決別する」「成長を積み重ねる」「腰を据える」「情報を求める」「医療とつながる」という7つのカテゴリーからなる親の適応行動過程が明らかになり、その適応行動過程を促進することで子どもの回復を促進できると考えられた。

以上の研究から、社会的ニーズが増しており、対応が困難な摂食障害のある子どもと家族に対する看護実践への示唆を得ることができたのは意義深いものである。しかし、主要研究といえる研究3では、理論的飽和に達していない点、対象者を父親と母親に分け

て検討してみる必要がある点などの課題を抱えており、今後は対象を拡大して研究を発展させることが期待される。また、家族支援の方法を明らかにした段階でとどまっており、さらに介入研究を行うことで、その有効性を証明する必要がある。

論文審査では、研究の背景、文献検討、研究方法と倫理的配慮、結果と考察について学位申請者から説明を受け、審査委員との質疑応答を行い、本論文の独創性、看護学的意義を認めた。また、それぞれの研究は、日本看護科学学会誌などに掲載されており、わが国の看護学分野において一定の評価を受けたと判断する。

総合的に判断し、学位申請者の種吉啓子氏は、博士（保健学）の学位を得る資格があると認める。

掲載誌：

- 1) 種吉啓子（2008）. 摂食障害のある子どもをもつ親の適応行動過程に関する研究. 日本看護科学会誌, 28（2）, 3-11.
- 2) 種吉啓子（2006）. 摂食障害のある子どもとその親を支援する病棟看護師の役割に関する研究. 日本看護科学会誌, 26（4）, 55-63.
- 3) 種吉啓子, 法橋尚宏（2006）. 摂食障害のある子どもの家族の家族機能に関する文献検討. 日本小児看護学会誌, 15（2）, 105-111.